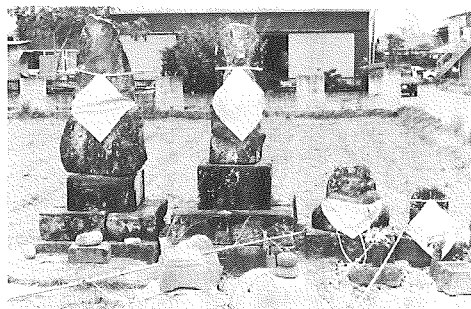


優勝、遂に神奈川県平塚で開催された「御前馬耕」の全国大会に出場し、見事に一等賞の栄冠に輝いたのである。

### 水げんかとかんかん石

この下飯盛とその南方に存在する中村や住吉、特に最南部に位置する大野とは堀水の流通問題で、たびたび争って喧嘩が繰り返された。堀水の流れる分岐点は、この村落の南部に懸った三つ橋で、この三つ橋（流れが非常に速い）を中心にして、昭和十五年頃から四十年にかけ毎年水喧嘩が続いた。当時の故山田八郎村長の頃が一番ひどく大野の故横尾半次外有志の方々に随分と世話をかけた。その頃の農民としては、一番切実な問題はこの用水問題であり、堀・クリークの上流と下流に住む村落民の間に水利上の相反目は当然でもあった。そのために村役場としても相当の予算を組んで、堀の川さらえを各村落に奨励したが、年々と村内の堀・クリークは狭められ埋まっていった。しかしこの河川による水喧嘩も、水田に灌漑用の電気ポンプが完成以来完全に解消されて嬉しい限りである。この毎年毎年しかも何十年も続いた「水喧嘩」も時代と共に消え失せ、ただ想い出深い昔語りとして残るのみとなった。



かんかん石

飯盛八幡神社の南方の鳥居から東へ約五〇メートルの道路端に、二つの石碑が建っている。その西側のは高さ二メートル位の石塔であるが、石で叩くとかんかんと音を出すことから「かんかん石」の愛称がある。一見して素朴な中にも気品豊かな石碑であって、農村には珍しい存在である。右側のは安永七年に建てられ施主は当時の庄屋忠左エ門であり、左側のは安政三年に江川甚兵衛・御厨新吉等が施主となって建立している。建立の由来について古老に聞いても全く不明で、調査の方法もなく、それが「かんかん石」の特徴かも知れない。

## 一九 大野

大野は本町の最西南部に位置する大集落で、現在の世帯数は合計二二二（一区と西区）東与賀町全体の一割五分を占めている。これを職業別に見ると、戦前は大部分が農業であったが、今日では約半数の一・一六に減じ、建設業（大工・ブロック・土木建築等）が二八の一割二分、次いでサービス業（商店その他）が二四の一割その他卸小売・運輸通信・水産業・製造業等で年々と多様化の傾向にある。

この大野に因んで佐賀県干拓史（坤）の「與賀地区の干拓」の記事の中に、「大野土井石垣」についての記録が載っている。その一部を要約したい。

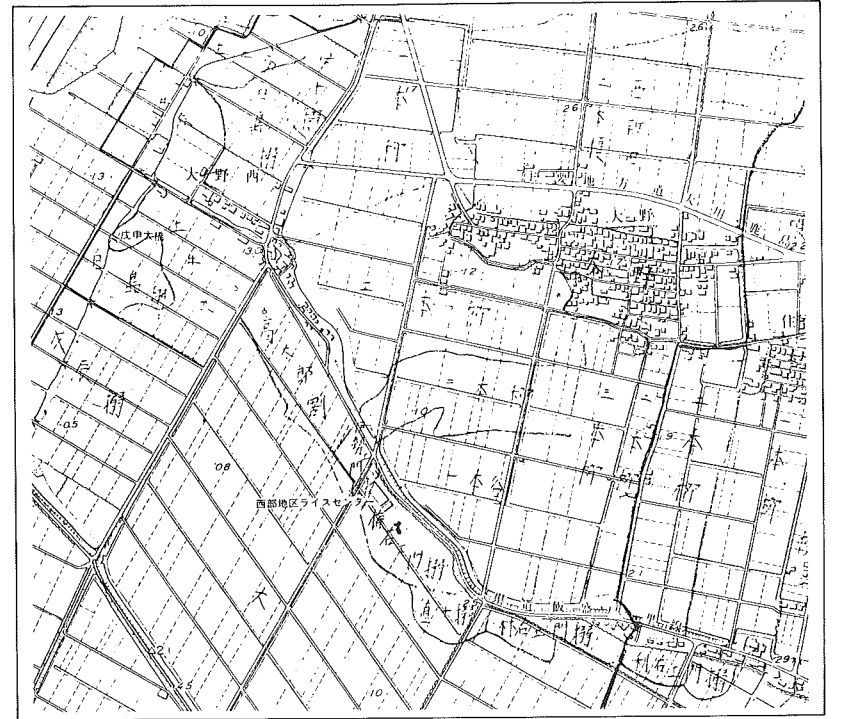
大野 即ちこの土井筋二〇町余の地域は、藤津郡竹崎の真北に当たり有明海では一番風当たりが強く、渦のもとになる葭も生えない場所である。正徳年間（一七一五年）の頃暴風と高潮のため、大野・住吉は言うまでもなく、鹿

の子・灰塚・十五田原（現在の佐賀市本庄町）まで大水害を被った。そのため佐賀藩では御城下までも災害を受けては大変だとして、領中から多数の割夫をかり集めて防波堤となる石垣を築いたのである。ところがたびたび暴風と高潮に見舞われて石垣は崩れ、その後は修復することもなく土井外にあつて瀉に埋まったという。

また当時の潮止めの工作方法や、この付近の小搦は天保（一八三〇〜一八四三年）年間以後の干拓であること、事業者の名前と思われる搦の名称があるから、多分民営であろうと説明している。

以上のことは現在の大野の西区付近の土井外田より、住吉の南部土堤に至

小 搦 各 地 図



る土井の外線に西側から「高太郎割・伊勢工門・権右工門・直十・林右工門・利右工門」等の小搦が、東方へ一列に並んでいる。これらの人名は当時この小搦を築いた際の事業者か発起人を代表する名前であろう。右頁の「小搦各地図」を参照して欲しい。

### 大野神社

町の軒先が建ち並ぶ大野地区のほぼ中央に、まだ木の香も馨る大野神社が、その威容を春空に映えて鎮座している。この神社の祭神は大綿津見神で、記録を探ると旧名称を「沖神社」と呼び、法人登記は昭和二十二年九月三十日となっている。「沖」の冠詞があるように、昔はこの辺一帯は海岸であつて、古老の話では、「この氏神様は当初より海の守り神として祀られた」との事である。

旧社殿は歳月と共に腐朽して雨漏りさえしたことから、その西側を通る町道新設のために昭和五十四年五月七日新築落成した。この社殿新築に関しては、昭和五十一年頃から村民の世論が高まり、当時の故碇壮次町長を顧問として、元町会議員福岡兼三郎、老人会代表故北村豊次や区長山田鹿雄・碇勉・芦原末男等が発起人となり、まず隣保班ごとに三カ年間を目途に一戸当たり月額一〇〇〇円宛の積立貯金を始めた。ところがその頃は年々と物価が上昇したので、むしろ早急に建設した方が得策だとの強い意見や要望が高まって来た。そのため各区長は隣保班長会を開催し、神殿建設についての協議がなされ決定されたのである。

かくて建設委員長には石丸朋一が推せんされ、佐賀郡川副町の田原丈夫を棟梁として着工した。まず仮遷座祭を宮田豊宮司（佐賀市北川副町）の司会により昭和五十三年七月十一日に、次いで旧殿の解体作業・地鎮祭・上

棟式等も古式にのっとり厳肅に取り行った。遷座祭を同五十四年四月十六日無事に済まし、待望の落成式の祭典を同年五月七日の佳き日を卜して、めでたくも晴れやかに挙行したのである。

因みにこの新社殿の総工費や諸経費の合計額は、二七〇〇万円の巨額を要したが、前述の通り村民・氏子の積立貯金および一戸平均五万円の拠出金それに篤志寄付金その他を以って当てられている。

### 夜警と火の用心

この大野では大正の初期二〜三年間の頃、数回にわたって続けざまに不審火や原因不明の火災が起こり、農家の数軒がそれぞれに全焼した。そのために火事の災害と恐怖から逃れるべく、一年間で火気の多い十一月から翌年四月までの期間は火災予防に当たっている。即ち毎晩夜の一二時から翌朝四時までの間、四人が二組となって拍子木を打ち町中の辻々を歩き回るのである。この夜警期間は寒気が厳しく、雨風や吹雪にもめげず今日まで実に六〜七〇年の長年月を一晚も欠かさず継続されており、悲惨な火魔を防ぎ治安と警備にも勤めている。前述の通りこの大野村は本町随一の大集落であるが、大きい事故や災害が無いのは、こうした隣保互助による常日頃の住民の協力と実践の賜である。

### 名木 “やんぼし松”

大野村の本土井ができたのは、推定四〇〇年前といわれるが、現在のライスセンター西側に、名木 “やんぼし松” がただ一本横に長く繁茂していた。その昔「山伏し」がこの大野の海岸土堤に流れ着いた記念として植樹し

たことから、この “やんぼし松” の愛称が生まれたのである。この黒松は樹齢も相当に古く、根元の幹の太さは大人二、三人が両手を広げて回しても回しきれないほどの大樹であった。

樹幹の高さは五〜六間であったが、幹と枝が土堤に沿って横に長く広がり、ここを通行する人たちは馬を引いたり、藁を積んだ車力を挽いて長く伸びた幹下をくぐって通るといふ、極めて風流で洒落た老松の姿勢であった。したがってこの松は村民の老若男女の人気を呼び、農耕作業の際のいいこの場となったり、時には村内外よりの見物客もあった。ある時の県知事は風雅にも馬に跨り乗って毎月一回は必ずこの「やんぼし松」を訪問し讚美したという逸話も残っている。

しかしこの老松も時代の波には勝てず、先の東与賀町全域にわたる圃場整備事業実施前の昭和三十九年末には遂に伐採され撤去される運命となった。緑保存の自然環境からいっても、名木保護の立場から考えても、誠に残念でならない。今は往時の人々から親愛され重宝がられたこの名木も、坂田三郎（大野出身現在七二歳）の立派な名画（油絵）となつて、大野公民館に掲げられ、見る者をして懐旧の情を禁じ得ない。

野 この「やんぼし松」と相對して、東へ三〇〇坪の地点に「左近殿切り」と呼ばれる霊場がある。これも年代や人物等全く不明であるが、「左近」という武士が何かの罪に問われて、この地で処刑された跡であろうとの伝承がある。この付近は以前から高さ一〇坪の堤防で、その下を一の谷といつ



名木 “やんぼし松”

ここに竜王さんを祀った石碑も在ったが、現在では全く見当たらない。これも時代の風化現象であり、そして物質文化への移行発展とも考えられよう。

## 大野の宮角力

繁華街の映画館や娯楽設備に恵まれない農村の田舎では、古来自らの慰安を求め娯楽を楽しむために、腕自慢や力競べ等の運動競技が盛んであった。本町でもその例にもれず、特にこの大野村では若い青年層を中心に中老や少年を交えて格闘技の一種である角力熱が旺盛であった。始めは各周路毎に野っ原での草角力から出発し、漸次お宮の境内に片やを作り、後には村中央の青年会（現在の公民館）西側空地に立派な土俵を築き、祭日や余暇を利用して技と力を練ったのである。この大野における青年層の角力熱は、近くの搦・今町・作出等の青年たちを刺激し、ついには東与賀全村落に角力愛好の風潮が広がった。かくて大正十年代から昭和に入っても戦前・戦後まで、佐賀郡内でも一番優秀な角力選手が揃い、各地区各神社等の大会に出場して、雄を競い覇を争ったものである。

当時その主将格となり先導役をつとめた山田寛（股名源氏山）は、その頃を想起して次のように述べた。

大野には角力好みの先輩が多く、その指導と奨励が一番良かった。角力にはこの「しごかれる」と「練習」とが最も肝要である。その頃東与賀村の招魂祭が毎年十一月十五日に学校の校庭に土俵が築かれ挙行されたが、どこの村落よりも五名ずつの選手が出場して、勇壮な角力大会であった。これには村としても力を注ぎ奨励のために補助金も出してくれた。後には先輩や学校の先生に引率されて、佐賀郡内は勿論県内各地の角力大会に出場

した。その頃になると東与賀全村から優秀選手を選抜して、佐賀郡青年団の角力大会・佐賀県護国神社の祭典角力その他中野代議士参議院議員当選祝賀大会にも出場してよく優勝旗をものにしたのである。特に大正五年十一月三日の明治神宮全国角力大会には、年齢僅かに二五歳であったが佐賀県の代表選手として、小城郡牛津町関川堅次君等と出場し、四勝一敗の好成績を修めたことは、私の生涯中でも最大の歓びであったと語る。

更に角力競技は、体と体・精神と精神を互いにつけ合って勝負を決する格闘技であるために、一度先輩と後輩そして師匠と弟子との関係が結ばれると、その仁義と情愛は実に堅固なものである。往時を思えばわが村の先輩鬼崎末吉・鶴田祐作後輩の吉田吉郎・山崎次郎等があり、他町村では小城郡の時森や川副町の大塚・梅野等、裸人生の親友であり土俵上の仲間であって、うたた感慨無量ですと、このようにしみじみと語る往時の猛者「源氏山」の両眼にはキラリと光る涙が浮かんでいた。

## 本土井と野狐

大野地先の本土井付近から白島や隣町の佐賀市西与賀最南端は、昔から草原と笹藪に覆われた海岸堤防に囲まれていたために、野狐の生息地ともなった。古老の話では明治初年から二・三十年の頃にかけて最も多く群をなしていたらしく、終戦（昭和二十年）後も大野神社の裏道辺りまで一匹二匹と仲間をつくり痩せ細った姿を見せることもあったとのこと。この狐群は人間に危害を与えるよりも、民家に飼っている鶏を取るために出て来るのである。夜になって鶏舎に安眠している鶏や雛を捕えその血液や卵を仔狐に飲ませて、元気づけるそうである。

これらの狐群は一度甘い味を占めると、毎晩のように出て来て、その被害は相当に大きくなる。そのために狐捕りのばなを掛けるが伶俐な動物で仲々掛からない。仕方がないので夜中けたたましい鶏の鳴き声に、村人はこれ来たとはばかりに蚊帳から飛び起きて、鶏を口に喰わえている狐を追いかけるのである。驚いた狐は獲物だけは決して離さず、足早に逃げて一向に追いつけない。しかし狐は二〇〇ばかり走ると必ず後方を振り返って、人を警戒するという習性がある。その振り向いて立ち止まっている時間を見計らって、人は追いつくまでに迫るがその瞬間に走り出して、追っても追っても追いつけないこと―これも古老たちの述懐する笑話である。よく農村の昔語りに「狐のごぜん迎え」とか、「木綿織りの機はたの音をさせる」等の流言もあるが、果たして真実はどうであろうか疑問である。

## 二〇 大 授

大授は東与賀町での最南端に位置を占め、現在の世帯数合計六七（一区―二区―三区―四区―一七）が、堤防沿いに東西に長く広がっている。昭和の初期の入植当時は、ほとんどが農業を営んでいたが、半世紀を過ぎた今日では職業も多様化して、漁業・大工・公務員（役場・佐賀市役所）等種々である。

この大授の村落を抱擁する大授搦は、東西一五六〇間・南北六五〇間面積は実に三〇〇余町歩の茫洋たる一大干拓である。大正十五年に工を起し昭和九年に竣工するまで九カ年の歳月を要したが、この干拓企業組合設立

代表者は、当時の村長山田八郎外一七名となっている。この人たちの献身的な努力によって佐賀県はもとより全国でも有数のこの大授搦が完成したのであるが、その生みの親は何としても当時作土井に在任した故原作一翁（七四歳）であり、翁がただ一介の農夫でありながらこの破天荒の大事業を見事に貫徹したのであった。この原作一翁の卓見と気魂とは、大授搦のある限りそして東与賀の存する限り忘れることのできない大恩人である。

大授という村落の名称は、大搦おおがらみの大と授産社搦の授の上についた頭文字をとって「大授」と名づけたとのことである。この大授の守護神としては、第一区には天照大神を昭和十三年に、第二区では龍王さんを昭和八・九年の頃に祀り今日に至っている。そのお祭りは毎年四月二十日と十月二十日の二回でいずれも幟を立て戸主全員が集まり神酒を飲み供饌を食べて、五穀豊饒を感謝するのである。

入植当時の出身地別調査

区別	町村別	東与賀	川副	諸富	西与賀	鍋島
第一区		六	三	〇	〇	〇
〃二区		二	二	二	二	〇
〃三区		八	〇	〇	〇	一

備考

1、終戦前後は、福岡県や多久市・佐賀市・神埼町（千代田）よりも入植したが二〜三年前は大授より出て行った人も四〜五戸ある。

2、現在農家の耕作反別は平均一町六反歩で、最高は四町五反、最低は約二反五畝歩である。